



Title	被災地域住民による創発的支援活動の実践知に関する研究
Author(s)	王, 文潔
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81985
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 王 文 潔 ）	
論文題名	被災地域住民による創発的支援活動の実践知に関する研究
本稿の目的は、災害を機に被災地域の住民が主体となって形成される多様かつ個別具体的な支援活動の創出過程を明らかにし、その他の被災地域へ共有されうる経験を提示することである。本稿では、実践の場から生成される経験群を支援の技法として抽出するのではなく、行為主体を取り巻く環境や状況に依存しているものとして探求することを目指している。 序章と第1章では研究動向を概観したうえで、本稿の2つの課題と対処策を提示している。つまり（1）外部支援者の視点に立つ従来の災害支援論では、災害直後から長期的な復興期までにわたり自己組織化して支援にあたる地域住民が十分に対象化されていない。そのため序章では、既存システムから疎外されやすい潜在的被災者への支援を行うべく、制度や伝統的な関係性から距離を取って創発的な支援活動を行う地域住民の活動領域に加え、支援活動を機に地域資源の豊かさを再認識し、地域社会のイノベーションを起こしうる地域住民の立ち位置を明確にした。 （2）寄せ集められた主体による草の根的な支援活動の創出過程への視点が不足しており、相互行為論に基づくアプローチでは被災者―支援者の両者関係を取り巻くネットワークや多様な場に関する議論が十分に深められなかった。したがって第1章では正統派暗黙知の認識論に基づき、支援活動の創出は、行為主体を取り巻く環境や状況に依存するという認識の必要性を指摘した。また本稿での方法論として、支援当事者による体験的な語りのみを分析するのではなく、共同行為を重視する被災地フィールドワークに根ざしたエスノグラフィーの手法を用いた。 2章から5章までは、事例の個別性から着手し、住民ボランティアによる集合体、多声の空間、個人を応援する家族・仲間、地域内外をつなぐ協働ネットワークという異なる人々のまとまりの中で模索された支援の形態、実践に表れる行為者の意識、他者との関係性、資源、活動領域などの変動を把握した。またそれぞれの実践はいかにして地域復興や防災など様々な局面に接続していくのかを明らかにした。 第2章では、「最も小さくされた人々に偏った支援を行う」ことを行動原則に掲げるネットワーク組織「よか隊 ネット熊本」が活動領域を確立するまでの2つの象徴的な活動現場の実態に迫り、被災地住民ボランティアが潜在的被災者を支援する意識を形成していく過程を捉えた。第3章では、熊本地震の被災地で形成された情報交換・意識共有の場における即興の場面を捉え、即興の発生条件として「被災キーパーソン・キープレイスを応援する寄り合い感覚」「促された参加ながらも役割を自覚する過程」「対立する意見を共同編集することによって新たな動向を誘発する工夫」を提示した。第4章では、みなし仮設被災者や在宅被災者を対象とした地域食堂の運営者による「ありあわせのものでやりくりする」運営プロセスを描いた。その結果、運営者が災害発生前からもつ個人ネットワークの各要素の潜在的有用性が災害支援の文脈において再認識され、多様な制限に立ち向かうための新たな資源の獲得が行われることを確認できた。こうした個性的な支援創出過程で活用された資源の意外性や資源獲得ルートの偶然性は、災害支援の「ほかでありえた可能性」を示唆した。第5章では、熊本地震による被害が比較的少ない熊本県宇城市豊野町のある宗教者が、地域の復興と防災に危機感を抱き、巻き起こした復興イベントに焦点を当てた。豊野地域の宗教文化や地域内外の担い手の思いと関係性などを捉えたことに加え、イベントを下支えする協働ネットワークが地域の災害救援ネットワークとして機能し、豊野町にとどまらず広域的支援につながる可能性を見出した。 第6章では過去の被災地での事例を踏まえ、災害を機に始めた創発的支援活動の収束・継続、平常時への移行をめぐる検討を行った。その中で災害支援を通して資源を補いあう地域ネットワークの形成と、そのサポートをするための外部支援団体のあり方を論じた。 以上を踏まえて終章では、地域住民による創発的支援活動の創出過程にみられる各要素を整理し、調査対象者の現在（場やネットワーク）を起点に、支援を可能にした過去（地域文化や人生経験）、支援が支援でなくなる未来（新たな地域ビジョンや広い視野からの社会課題への関心）が描き出されていることを確認した。またその他の被災地で共有されうる、本稿における災害支援の実践事例から導き出される経験群を提示した。実践知の共有不可能性という表現を用いて、被災地間の経験を共有するうえでの課題を指摘し、地域住民による災害支援が波及効果を通してさらなる社会的アクションにつながる可能性を示した。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (王 文 潔)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	稲場 圭信
	副 査	教 授	志水 宏吉
	副 査	教 授	渥美 公秀

論文審査の結果の要旨

本研究は、自然災害が頻発する日本社会にあって災害を機に被災地域住民が主体となって形成される多様かつ個別具体的な支援活動を対象とし、その創出過程を被災地でのフィールドワークに根差したエスノグラフィーの方法論を用いて明らかにし、その他の被災地域に共有されうる実践知を探究したものである。

序章と第1章では先行研究を検討し、2つの課題とその課題に対応する研究方法論を提示している。すなわち、第1に、外部支援者の視点に立つ従来の災害支援論では、災害直後から長期的な復興期までにわたり自己組織化して支援にあたる地域住民が十分に対象化されていないため、本研究では、既存システムから疎外されやすい潜在的被災者への支援を行うべく制度や伝統的な関係性から距離を取って創発的な支援活動を行う地域住民の活動領域に加え、支援活動を機に地域資源の豊かさを再認識し地域社会のイノベーションを起こしうる地域住民の立ち位置を明確にしている。第2に、従来の研究では、寄せ集められた主体による草の根的な支援活動の創出過程への視点が不足しており、相互行為論に基づくアプローチでは被災者・支援者の両者関係を取り巻くネットワークや多様な場に関する議論が十分に深められていない。したがって、本研究では、正統派暗黙知による実践知の認識論に基づき、支援活動の創出およびその「実践知」を個人を取り巻く包括的な存在として認識する必要性を指摘し、その調査方法論としてエスノグラフィーを採用したことを説明している。さらには、災害社会学の基本的枠組みとして「時間軸」を、コミュニティなどの「地理学的単位」を、ボランティアや友人集団を含んだ「社会的単位」の変動を意識し、本研究の分析視角として緊急社会システム論と集合行動論、創造的即興、ブリコラージュ、社会ネットワークの分析視角を導入することを明示している。

第2章では「最も小さくされた人々に偏った支援を行う」ことを行動原則に掲げる「よか隊ネット熊本」の支援における創造的即興の内容と発生条件を明らかにしている。第3章では熊本地震被災地で形成された情報交換・意識共有の場における即興の場面を捉え即興の発生条件を提示している。第4章では潜在的被災者向けの地域食堂の運営者による「ありあわせのものでやりくりする」運営プロセスを描くことを通して、運営者が災害発生前からもつ個人ネットワークの各要素の潜在的有用性が災害支援の文脈において再認識され、多様な制限に立ち向かうための新たな資源の獲得が行われることを明らかにしている。第5章では熊本地震による被害が比較的少ない熊本宇城市豊野町では、地域の復興と防災に危機感を抱いた地元宗教者が巻き起こした復興イベントに焦点を当て、地域文化や地域内外の担い手の思いと関係性などを捉えたことに加え、イベントを下支えする協働ネットワークが地域の災害救援ネットワークとして機能し、豊野町にとどまらず広域的支援につながる可能性を見出した。第6章は、災害を機に始めた創発支援活動の収束・継続平時への移行をめぐる検討を行い、その中で災害支援を通して資源を補いあう地域ネットワークの形成と、そのサポートをするための外部支援団体のあり方を論じている。終章で、地域住民による創発的支援活動の創出過程にみられる各要素を整理し、その他の被災地に共有されうる経験群を提示している。

本論文は、被災地における比較的注目度の低い草の根的な被災地住民の支援活動を対象としている。現地の人たちと年月をかけて丁寧に関係性があるからこそ実現した研究であり、理論的にも緻密に分析された優れた論文となっている。以上のことから、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。